# 楽しい喫チン

# 楽しい喫チン 〜ビッチ師匠と愉快な泥沼〜

**EntsCat**

**https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=20857689**

R-18, モ腐サイコ100, 霊幻愛され, ♡喘ぎ, 濁点喘ぎ, 島霊, ショウ霊, 最霊, 霊姦

ビッチ師匠の愛されです。師匠が攻めたちを振り回します。めちゃくちゃ人を選びます。♡喘ぎ、濁点喘ぎ、霊姦が有ります。
良ければお付き合いください🌸

いつもいいねやブクマ、絵文字やコメントなどありがとうございます！とても励みになっています🌸
マシュマロもありがとうございます〜！https://marshmallow-qa.com/entscat?utm_medium=url_text and utm_source=promotion

モブ「え？僕ですか？確かに師匠は僕のですけど……まあ、最期に師匠が還ってくるのは、僕の所なんで」

# Table of Contents

# 楽しい喫チン 〜ビッチ師匠と愉快な泥沼〜

ビッチ師匠に攻めが振り回される話です。
キャラ崩壊凄いです。お楽しみください。

２ページ目に進むものは一切の希望を捨てよ。

「お前その内、殺されるからな」
呆れたエクボの声が病室に響いた。
「もう刺されてんだよなぁ……」
思わず腹を見る。遊び相手との痴情のもつれで刺されて、緊急入院。
流石に恥ずかしくてこっそりエクボに色々と都合して貰った。
「しかも２回目だろ、確か。学習しろや」
「だからぁ、今回は既婚者とだけ遊んでたんだよ！！完全に俺は遊ばれた側のワケ、ＯＫ！？」
「……それはあくまでお前の主観だろ」
ガチャ、と病室のドアが引かれる音がしたので、俺は慌ててエクボの手を取って指を絡ませる。突然のことに驚いたのかギクリとエクボが硬直した。
「ん……ぎゅってして……？あ、どうも」
敢えて甘い声を出してから、よそ行きの声に切り替える。入ってきた医者が息を呑んだ。
「……明後日には退院です」
「そーですかー。どうもー」
ニッコリ笑ってヒラヒラと手を振る。
「……オイ、何しやがる」
エクボがばっと手を払った。
「あ、ごめんな。あいつ寄りを戻したいって煩くてさ……ちょっと牽制したかったんだよ」
「オイマジかよ今の医者も……なんで、別れたんだ？」

どこか深刻な声をエクボが出す。
「飽きたんだよな、アイツとのセックス」
分かり切ったこと聞くなよ、と俺はしらけた。
「既婚者だからサクッと切れると思ってたのにさ、なんだか知らないけど奥さん子供と別れて、俺と籍入れたいって言い出してさ？まいったよ」
ため息をついた俺に、被せるようにエクボがクソデカため息をつく。
「お前本当、殺されるぞ。もう男遊びやめろ」
そうだな、と口だけで呟きながら、俺はどうやったら安全にチンポを喫せるのか、ぼんやりと考えていた。

※

アナルにハマって、最初にぶち当たった問題は「男は出したら力尽きる」ってことだった。大体の男は１回、精々多くて一晩３回。運動量が多いから、毎日もそうそうできない。逆に俺の方は１０回でも２０回でもイけるし、生まれつき身体が柔らかいから負担もほとんどない。だから、「盛り上がってきた！」って時に、相手が満足して寝てしまうのだ。
その解決法は、簡単だった。一晩に２人と寝ればいい。そうやって発展場で楽しんでた俺は──次の問題にぶちあたってしまった。
相手に飽きてしまうのだ。
ＡＶだって、３回も見ればヌけなくなるだろ。それと同じ。
前聞いたトークに、おんなじ手順に、変わり映えのしない体位。チンコの形まで覚えてしまうと、オナニーしてんのと変わらない。
だから飽きたらさっさと切って、次のチンポを漁ってた。
そんなことを繰り返していたら、徐々に問題が起こり始めた。
セックスしてたら付き合うって話になることが多かったから、俺は言われるままに付き合ったのだ。そして飽きたら別れた。……そしたら逆上されて、トラブルになるようになった。わけわかんねぇ。
仕方ないからなるべく切りやすそうな相手を選んで喫チンするようにしたが、それでも２回刺された。理不尽だ。

どーしたら楽しく遊べるのか……。

「また来たんですか、アンタ」

「ココ、男の店員が多いから来やすいんだよ」
爪解体後、なんやかんやあってこの美容院の店長をしている島崎があからさまに嫌そうな顔をした。
「こっちは貴方に来て欲しくないんですがね……あっ、いらっしゃい」
「ザキシマ〜♡来たよ〜♡♡♡」
入って来た女性客がデレデレと島崎に絡みつく。メイクも髪形もバッチリだが、「毛先ちょっとザキシマに切って欲しくてぇ♡」と甘えた声を出している。
（ふむ……）
その姿を見て、ピーンと来た。
ノンケのヤリチンなら、トラブルにならないのでは？
そう、島崎のような。
コイツは女性関係も派手で遊んでるのを、他の美容師から聞いている。
（……いけるか？）
俺はじっと島崎を見つめる。島崎はすぐ俺の視線に気が付いて、嫌そうに顔をしかめた。
（いけるな）
島崎は俺を嫌ってる。ということは、俺を意識してるってことだ。
好きの反対は無関心、ってな。
勝率は五分五分。負けたところでペナルティ無し。よし、夜に声掛けよ。

※

「お疲れ」
出待ちをして、仕事上がりの島崎に声をかけると、整った顔が心底嫌そうに歪められた。

「警察呼びますよ」
「ひっでえな、誘いに来ただけじゃん」
「誘い？なんの？」
「な、俺とセックスしねえ？」
「はあ！？！？」
うわ、めちゃくちゃ面白い顔になった。
「……何を企んでるんですか？」
「何も？ただ、島崎セックス上手そうだから、エッチしたいなーって思っただけ」
「巫山戯（ふざけ）てる……貴方、私に嫌われてる自覚ないんですか？」
うわ、気のせいか殺気まで見えてきた。
「んー……じゃあ、俺をレイプするか？」
「はぁ！？！？！？！？」
「嫌いなやつを組み敷いてさ、好き勝手犯してさ、泣き喚かせて……きっとスッキリするぜ？」
「アッタマおかしい……」
吐き捨てながらも、喉がごくりと上下したのを見逃さない。
「……こっちです」
腕を掴まれて駐車場のミラトコットの前に連れて行かれた。可愛らしいブルーとアイボリーのツートンカラーだ。
「うわ、可愛い車。似合わねー」
「女受けがいいんですよ。さっさと乗ってください」
助手席に乗り込もうとすると、チクッと指に何か当たった。ピアスだ。
「忘れ物だぞ」
親切でダッシュボードに置いてやると、島崎が微妙な顔をした。
「ワザとでしょう」
「は？なんでそんなことするんだよ」
「皮肉ですか？ウィットが効いてますね」
呆れたような声を出して発進する。
コロコロコロ、と足元に口紅が転がってきた。うわすげえ、シャネルだ。

「彼女さん、コレ無いと困るんじゃねえの……」
そっとまたダッシュボードに置く。
「私に恋人は居ません。……勝手にマーキングしていくんですよ、分かるでしょう？」
「へぇ、噂には聞いてたけど……マジでセックス上手そうだな、楽しみだわー」
すすす、と島崎の太ももを撫でるとビクっと長身が跳ねた。
「やめてください、事故りますよ」
「いつも車でしゃぶらせてんだろ？これぐらいで動揺すんなよ。……ところでどうやって運転してんの？免許どうしたんだ？」
今更だが、島崎はほとんど目が見えていない。らしい。
「免許は特例で貰ってます。無いと不便なんでね。見えないけど分かるんで、運転は問題無いですよ」
なるほど、さすが元五超。スペックが高い。
「で？車でスんの？」
「まさか。シートが汚れる」
どこかの駐車場に停めて、歩いてマンションに向かう。
「テレポートしねえんだな」
「目立ちたくないんでね」
そりゃそうか。モブや芹沢だってそうそう超能力を移動には使わねえもんな。悪目立ちする。
「ここです」
一人暮らしの男性宅っぽい感じだな、ワンルームか……とドアから部屋を覗き込んで思ってたら。
「痛っ！！」
背中を蹴り飛ばされた。
「何す……っがはッ！！！！」
背中にブーツの底がめり込む感覚。
「店で、私がどんな気持ちで貴方の顔を見ていたか分かりますか？」
「ぁ、ぐ……ッ！」
ぐりぐりと靴で背中を踏みつけられて呻きが漏れる。プレイ激しいな……。

「何度殺してやろうと思ったか……！！」
うーん。なんでそんなに恨まれてるんだっけ？俺どこで恨みかったんだろうな……。
「でも、ま、こういうのはいいですね。厄介な連中に睨まれずに溜飲を下げられる」
「っ、は……ッ！！」
足を退けられてホッとしたのも束の間、乱暴に腰が引き上げられる。
「今更、暴れないでくださいよ」
カチャカチャとベルトが外され、下着とスラックスが引き摺り下ろされる。
ケツに冷やりとした風が当たるのにみじろぎしたら、後ろから島崎がベルトを外す音が聴こえてきて。
喉が鳴った。もちろん期待で。
「ゴム……これ、っ！？」
ポケットからコンドームを取り出そうとしたら、ネクタイをリードのように引っ張られてぐんと背中を逸らされた。
「あ、ッ……！」
「何故私が貴方に気を遣ってやらなければならないんです？」
嘲笑うかのような声が耳に落とされて、がっと無遠慮に骨盤が掴まれる。いや、俺はナマでもいいけど、尿道炎なっても知らねーぞ。
「あ、ぁア……ッ♡」
ずぶぶ、と疼いていた所にチンコを埋められて、ウットリした声が漏れた。
「……ッ、」
思わずキュンキュン締め付けると、悩ましげに島崎も息を詰めた。
あー、感じてんな、コレ。俺名器らしいからなぁ。自分で自分に突っ込んだことは無いから知らねぇけど。
「やっ♡はぁ、はぅっ♡」
ズッ、ズッ、と無遠慮に抽挿されて、ジンジンと絶頂感が下半身にわだかまってくる。
「あ゛っ、あ゛……ッ♡」
引っ張られるネクタイが少しキツくて、内側に指を入れてハァハァ

言っていたら、「犬みたいだ」と笑われた。お前がやってるんだろーがよ。
「ふ、っ♡くぅ、んっ♡」
サービスで犬みたいに喘げば、またギクリと島崎の身体が強張る。
いいから腰振れっての。チンポ合格なんだからさ……ッ♡
「やっ♡んっ♡んっ♡ン……ッ♡」
１９センチってとこかな。まあまあデカい。硬さもまあまあだけど、ちょっと太めで、角度がエグい。こりゃオンナ泣かせだわ。俺も気持ち良すぎて涙出てきた。贅沢言えば、もっとカリが張ってると嬉しかったんだが……っ♡っあ、イく……っ♡
「んゃぁあ……ッ♡」
「ッ、イく時は、ネコみたいです、ねッ！！」
ビクビクと気持ち良く快感に浸ってたら、ぐいっとネクタイをまた引っ張られた。
「ぁ……」
じわ、とナカで精液が広がって、キュン、と前立腺あたりが疼いた。
「無理矢理されてイくなんて、どんな性癖してるんですか？」
「アッ♡♡♡」
ズン、と中出ししたモノをかき混ぜられて、甘ったるい声が鼻に抜ける。
持久力は、満点っ♡♡♡♡♡

※

いつの間にか寝落ちしてたらしい。
ぱか、と目を覚ますと、俺はソファーの上で、裸でバスタオルにくるまっていた。更にその上から毛布がかけられている。
「後始末してくれたんだ。ありがとな」
「……芹沢に何か言われたら厄介ですからね」
ベッドに仰向けになって、点字の本を胸の上に置いて指で読んでいた島崎がむくりと起き上がる。
「言わねえよ。なあ、良かったらメルアド交換しねえ？ヤりたく

なったらメールくれよ」
「……………………本当に、何考えてるんですか、貴方」
そう言いながら、スマホを差し出してくる島崎と、メアドとついでに番号を交換しておく。
「別に、何も。……ほら、俺の番号とアドレス登録しておいたから。これで俺は島崎のカノジョ、ってことで」
「はぁ！？！？」
歩こうとした島崎が思わず床に落ちていたスマホの充電器を踏ん付けて飛び上がっていた。そんなドジすんの珍しいな。
「じょーだんだよ。じゃ、いつでも連絡くれよな」
呆然とする島崎を置いて、ちゃっちゃと服を着て部屋を後にする。

うーん、アッチは大満足だけど、相手には不自由してなさそうだな……。遊び相手にはなってくれなさそう。ま、味見できただけ良しとするか。

※

今夜は昔の男に誘われて、高そうなジャズクラブに来ていた。
男の蘊蓄にうんうんと頷いて飲み食いして、腹一杯になってきた。そろそろ帰ろうかな。
「……ここはジャズだけじゃない若手の登竜門的な立ち位置のクラブで、ここからデビューしたバンドが山ほどあって……」
「へえそうなんだすごいな」
ヤりたい男は必死に話しかけてくるが、俺もう今日のチンコ探しに行きたいんだよな……。
一応男の目線と合わせてステージに目をやると、オレンジの髪のバンドマンとバチッと目が合う。若っ。
バンドマンがヒラリと手を振ってきたので、俺も笑って振り返した。ファンサかな。
……と思ってたら、汗だくの青年がずいずいと人並みをかき分けて、俺の方に歩いてきた。
「久しぶりじゃん。元気してた？」

誰だっけ。
「ごめん、誰だっけ」
そのまま素直に口にすると、カラッとした雰囲気のバンドマンは苦笑した。
「ひっでえな」
「じゃあ俺の名前覚えてんのか？」
「……えーっと……」
バンドマンは大袈裟に首を捻る。ナンパか？
「お互い様じゃねーか」
ま、ナンパならそれはそれでいいんだけど。サクッと遊べそう。
「いや俺はここまで出てきてんだって！あの……律の……」
「ああ、律くん」
本当に知り合いだったらしい。でもどちらにしろほとんど会ったこと無いのだろう。
「俺な、アキラって言うんだけど」
「そうだっけ？」
飽きやすい新隆だから、アキラ。いつも使ってる偽名だ。
「良かったらセックスしねえ？俺がオンナ役で。溜まってんだよね」
バンドマンの目が丸くなる。
「……うん」
なんだか妙に幼く、こっくりと頷いた。

※

「アンタさ、超能力者とも寝てんのか？」
バスルームからタオルを腰に巻いて出てきたショウくん（そう名乗った。偽名だろうな）が言う。
「ん？うん」
俺は島崎の顔を思い浮かべて頷いた。
「……怖くねーのか？」
「何が」
俺はショウくんの腰からタオルを滑り落とさせて、チンコを数回シ

ゴいてテキパキとゴムを付ける。
「殺されるかも、とか思わねえの？」
俺はきょとんとしてしまった。
「あのさあ、裸んなって抱き合おーってだけで、相手が超能力者でも普通の人でも危険度は変わらねーよ」
実際普通の人に２回刺されたし。
「一緒だよ。チンポ勃てて腰振って、超能力者も一般人も猿も猫も虫も、なーんも変わんねーよ」
まあ俺、虫とはヤったこと無いんだけどな。虎とはあるけど。そこは誇張した。
「……」
ショウくんはびっくりするほど優しく、俺の頬を撫でた。
「ん……」
ちゅ、とゆったりと柔らかく口付けてくる。ぷるぷるの唇が気持ちいい。
ゆっくりと気遣われながらベッドに押し倒される。慣れてんなー。期待できそう……ッ♡
「……胸とか、感じんの？」
ペタ、とタコのある手のひらで胸を撫でられる。
「うん。好き……っぁあ♡」
くちゅ、と乳首を口に含まれて、コロコロと舌で転がされた。ずくずくと腹の中が熱くなる。
俺は身悶えながら、ショウくんのチンポをクニュクニュと揉んだ。
「っ、手コキ上手っ……」
「ショウくんも、ペロペロ上手ぅっ♡そんなされたら、俺チクビだけでイっちゃうからあっ♡……いつでも、挿れていいからな？♡♡♡」
もじ、とショウくんの足を挟んで腰を揺らすと、熱い息を吐いたショウくんがクチュっと俺の性器を掴んで擦ってきた。
「っあ♡こえっ♡こえ出るからあっ♡萎え、るだろ……っ？♡」
「わかんねーけど……俺は、アンタの声、興奮する」
なら気にせず喘ぐか。
「嬉、し……っ♡あっ♡イく……っ♡」

びゅる、と腹に精液が出る。前戯でイかせてくれるのかなりポイント高いな……流石バンドマン……遊んでるだけはある。
「は……っ♡は、ぁっ……♡」
絶頂の余韻でくったりしてたら、ぐっとショウくんが両膝の裏を押し上げてきた。
「くれよ……ッ♡」
俺は自分で足を上げて、アナルを指でくぱ♡と広げて見せた。
「……ッ！」
煽られたらしいショウくんは性急に腰を進めてきた。
「んぁあああぁあっ♡♡♡すごぉ……っ♡♡♡」
チンポはいってきたあ……っ♡♡♡
ごりごりごりっ♡と腹の裏を擦られる。角度やばぁ……っ♡かったいのでパンパンされたら嬌声しか出ないぃっ♡♡♡
「イイっ♡そこぉっ♡♡♡」
「すっげぇ声出すじゃん……ッ」
ポタポタと腹に垂れる汗すら気持ちいい。長さは１８センチぐらいだけど、硬さと角度が最高っ♡
「ショウくん好きぃっ♡ちゅーしよ……ッ♡♡♡」
このチンポさいこお……っ♡♡♡
「かわいー……」
うっとりした声を絡め取るようにキスを強請る。
「……なあ、俺のこと好きなの？」
「っ♡でないとっ♡誘わない……ッ♡ショウくん、だいすき……♡」
このチンポ、好きぃ……っ♡
「……そっか」
噛み締めるように言ってショウくんは角度を変えてきた。
「ふぁんッ♡イくぅっ♡♡」
「なあ、アキラさん」
イく、イく、イく……っ♡
「な、にっ？♡」
「俺の番号教えてやるからさ、呼び出したら来いよ。……抱いてやるから」

「わかっ♡たぁっ♡♡」
びゅるる、とショウくんが奥で爆ぜた感触がして、あ、と俺はコッソリ声を上げた。
イけ無かった。

※

（どーすっかなー……）
まだ遊べる時間だ。でも今から誰か口説くのもなぁ……と思って携帯を見ると、なんと驚いたことに、島崎から何度か着信とメールがあった。慌てて掛け直す。
「……悪ぃ悪ぃ、立て込んでてさ」
『いつでも連絡しろ、と言ったのは貴方でしょうに』
不機嫌そうな声に猫撫で声で返す。セックスできそう……っ♡
「で、何の用？」
『今、暇ですか？ご飯でもどうです』
思わず舌舐めずりしそうになる。
「メシはもう食ったんだよなあ。……ホテルなら行きたい」
『……っ、直裁的ですね。いいでしょう、行きましょう』
「やった！どこで待ち合わせする？俺、今、××駅でさあ」
『迎えに行きます。東口で待っててください』
切れた電話を思わずマジマジと眺める。そんなに早くヤリたいのだろうか。
ショウくんと次会う日のやり取りをメールでしていたら、数分もしないうちに島崎が来た。黒のシビックだ。
「わ、かっけえ！」
「でしょうね。貴方はこういう分かりやすい車に弱そうですからね」
憎まれ口を叩く島崎を気にせずに、助手席に滑り込む。足元のドリンクホルダーにスタバのアイスコーヒーが挿してあった。
「これ貰っていいの？」
「どうぞ」
ずず、と有り難く喘いでかすれた喉を潤させて貰う。

「この車、借りたのか？」
「いいえ、買い換えました」
「はー、羽振りのイイこった。羨ましいね」
「女受けより、男受けしたくなりましてね。……この車、羨ましいですか？」
「うっわ……」
苦々しく島崎の横顔を睨んだら、嬉しそうにニヤついていたので舌打ちしたくなった。
「そりゃあ、羨ましいよ。俺の稼ぎじゃあなぁ……」
「じゃあ、貴方も使っていいですよ」
ぽん、とスペアキーを投げて渡される。
「言ってくれれば、いつでも貸します」
「まじか、助かる」
とはいえ、別に車には困ってないんだけどな。スペアキーくれたのお前で５人目だし。

マンションについて。

「……シャワー浴びます？」
「ん、借りるわ」
今日はやけに大人しいな。気が変わらないうちにシャワー浴び
よーっと。
……と思ってたら。
「は、っ……」
お湯がしたたる中で、身体をまさぐられる。
「今日はちょっと変わった匂いさせてますね、貴方」
やべ、ショウくんのコロンかな……。
「っん、遅くなったから、居酒屋で晩飯食ってたら……酔っ払いに撫でくりまわされた、あっ」
すすす、と腹を切り裂くように上から下に指でたどられて、喉がひくついた。
「芹沢は何をしてたんです？」
「あっ……あいつは、学校だよッ……俺、１人、でッ……」

「へえ」
どこか嬉しそうに島崎の声が跳ねる。きゅ、と性器を握られて、ズクっと甘い痺れが走った。
「あ、あぁ……っ」
「仕事の後で貴方を抱けると思えば、すっ飛んで来そうなものですがね」
「……芹沢とは寝てねえよ」
これは本当。俺は、エクボとか芹沢とかモブとかトメちゃんとか、相談所関係者とは寝たく無い。失うのが怖いからだ。
「……へえ？」
「今は、島崎一筋だよ」
これは嘘だ。だけど、わざわざ「お前はいっぱいいる肉ディルドの１人だよ」なんて言う必要は無い。失礼ってもんだからな。
ぴく、と震えた島崎に、抱きしめられた。濡れた肌が密着して、心地よい。
「……どうして私なんです？」
「俺、メンクイなんだよなぁ」
「なるほど」
身体をよじって、正面から抱きしめる。
「どした？何か嫌な事あったのか？話聞くぜ」
「別に……何も無いですよ」
ちゅ、ちゅと首筋に口付けられる。ぴりっと痛みが走った。
「そうか？」
俺はゆっくりと島崎の背中を撫でる。
「貴方は……」
「ぁ、あ、……ん？」
くち、とローションを仕込んだ後孔を長い指が神経質にさぐる。
「私の能力、羨ましいですか？」
「いや、全然」
指の動きが止まった。
「できることがあるってことは、それに人生を引っ張られるってことでもあるからな。本当は画家になりたかった奴が、勉強めちゃくちゃ出来たりすると、本人も学問の道に引っ張られたりして──大人

になってから後悔したりするもんだ」
「貴方は──何の能力が欲しかったんですか？」
「……愛される能力、かな」
島崎が固まった。ヤベ、適当に話しすぎて踏んじゃいけない物踏んだか？
「……島崎、好きだよ。ちゅーして？」
なんかキスで誤魔化そう。
「んッ……！」
激しく口付けられてクラっとした。
「……ッ、貴方、私のことが好きなんですか？」
「でなきゃヤらせねえよ」
困ったように微笑んだ俺の唇を、また奪う。ぐいと片足を持ち上げて──挿入してきた。
「あっ♡あ♡イィっ♡そこっ、もっと、突いて……ッ♡」
ゾクゾクゾク、と何度も甘イキする。このチンポィイ……っ♡
「──っ、霊幻新隆、お前は……っ」
あ……っ♡もうちょっとで、メスイキできそ……っ♡

「ザキシマ〜？忘れ物取りに来たんだけどー」

ガチャ、と合鍵で部屋が開いた。ビシリと島崎が固まる。
俺は慌てて脱衣所から服を掴み、島崎に「車にテレポートしろ！」と小声で言った。刺されるのはもう勘弁だ。
「はー、びびった。でもま、いいスリルだったな」
テレポートしてもらった車内で適当に身体を拭いて、スーツを着る。
「お前は早く風呂場に戻ってやれよ。女の子待たすな」
「……私は、貴方を連れ込んでいることがバレても良かったんですが」
俺は眉を顰めた。
「あのなあ。あの子はお前のことが好きなんだろ？いたずらに傷付けるんじゃねーよ。大事にしてやれ」
車から降りようとした手を掴まれる。

「貴方が……貴方が傷付いたのは、放置しろって言うんですか」
「いいんだよ、俺は。慣れてるから。またな」
ちゅ、と優しく島崎の手にキスをして離させる。
うん。
寸止め 2 回も喰らってめちゃくちゃキツい。
早く次のチンポ探しに行きたい。

※

入り口が地下になっているバーが見えた。
こんな所にバーなんてあったっけ？
俺は色狂いで頭が馬鹿になっていたのか、何も考えずにフラフラとその店に入った。
「……ほう、生きてる人間がよくこの店を見つけられたな」
あ、最上啓示だ。
「へえ、バーやってんのか」
「何か飲むかね？今夜は混んでいてね。席は此処しか空いていないが」
最上が目の前の席を指でとんとんと叩く。
俺以外誰も居ないように見えるが、まあ、何か居るんだろうな。
「おススメのモクテル（ノンアルコールカクテル）くれ」
「丑三つ時も終わるからな。ラストオーダーになるがいいか？軽食は？」
「腹はいっぱいだからいい」
最上はシェーカーを振ってカクテルグラスにパチパチするアイスカクテルを注いだ。
「……なんでバーなんかやってんの？」
「永遠を過ごすとなると暇でね。ま、手慰みだよ」
「ふうん。客を喰うためかと思ってた」
バーテンって女遊び激しいって言うしな。
ピク、と最上の目元が震えた。
「──良く分かってるじゃないか」
はー、本当に喰ってんのか……そうだ！

「な、良かったら俺を喰わねえ？」
「……はあああ！？」
「具合いいって評判なんだぜ？」
「あ、ああ、そっちの意味か……結構だ」
「そっかー、残念だな〜」
ちび、とモクテルをすする。オレンジとレモンの香りがふわりと広がった。
「うまっ」
「……よくこんな場所のものを口にできるものだ」
「え？何かしたのか？」
「してないが」
「じゃあいいじゃん」
戸惑った様子で最上はため息をつく。
「少し、不用心が過ぎるのではないか？影山少年が可哀想になってくる」
「誰にでもこう、って訳じゃねえよ。アンタだからだ、最上啓示」
口から出まかせでじっと見つめると、きょとんと最上がこちらを見つめ返してきた。
「……もう忘れてるのかも知れないけどな、アンタは、凄え男だったんだぜ。……カッコ良かった」
それだけ言って、俺は目を落としてモクテルをすすった。
……うーん、ここじゃ男漁りもできないし、河岸を変えるか……。
と思っていたら。
戸惑いがちな視線が、じっくりと身体を這うのを感じた。
「……気が変わった。もう少しで店が終わる。２階で待ってろ」
よっしゃチンコげっとぉ！！
すっとカウンターに差し出された鍵を、指を絡めながら受け取る。
「分かった」
俺はすっと立ち上がって、暗いギシギシ言う階段を昇った。
古臭い板張りの小部屋に、ベッドと小さな机がある。向かいはトイレと風呂だ。幽霊なのにいい家持ってんな〜。
ジロジロと見回してると、トントンと音を立てて最上が上がってきた。

寝室に入って、シュルシュルとネクタイとカマーベストを脱ぐ。
「服、着替えるんだ」
「これは普通の物質だからな」
黒いソムリエエプロンを外しながら、最上が呟くように応えた。
ふう、と気怠く息をついて髪をかき上げると、最上は見慣れた濃緑のスーツ姿になった。
「まあ、たまにはこういうことに手を出してみるのもいいだろう」
独り言のように呟いて、最上はもたもたと俺のスーツを脱がそうとする。うーん、もしかして最上、下手……？
俺はさっさと最上のズボンをくつろげて、もう兆していた性器に手コキを始めた。こっちがリードしちまおう。
「な、お口でごほーししていい？」
「あ、ああ」
軽く押して、最上をベッドに座らせる。ぺちょぺちょと先端を舐めながら、スーツのジャケットを脱いだ。後は服を中途半端に着崩す。シャツをはだけて、下着を足首に引っ掛けておいた。なんか、こういうの好きそう。
「……味しねーな」
「実体化してる、だけだからな……」
ぷつぷつ先走りが落ちてくるのに、全然男臭くない。ま、いーけど。
僅かに息が上がってきた最上が、クシャッと俺の髪に指を通してきた。
「もっと、奥まで……」
「ん」
ずろろろ、と喉でチンポを咥えたら、くん、と最上の顎がかすかに上がった。アゴだりぃからさっさとイかせよ。
「はっ……はっ……」
じゅぼじゅぼと頭を上下させながら、ビクビクと痙攣する最上の太ももをついでに指圧してやる。凝ってんなー、お化けのくせに。
「ィ、っ……！」
どぷ、と喉に出されたモノを飲み込む。
「あ」

慌てて最上が俺の胸に──手を突っ込んだ。
「ぎゃっ！！何すんだよ！！」
「こんな濃い精気を取り込んで、どうなっても知らんぞ。淫魔じゃあるまいし」
ずる、と俺の胃から光の塊のようなものを取り出して、最上は自分の身体に押し込んだ。
「ふーん、そういうものか」
俺はベッドに放り投げていたコンドームを取って、くるくるともう復活してる最上のチンコにかぶせる。その様子を、ギラギラした目で最上が見ていた。
「騎乗位でいいよな？」
「あ、ああ」
ベッドに横たわった最上の上にまたがり、ずぷぷと逸物をケツに呑み込む。
「あぁあ〜〜〜ッ♡♡♡」
１６センチってとこ……なんだけど、前立腺にゴリゴリ当たるぅっ♡めちゃくちゃ硬い……ッ♡
「好きぃっ♡」
ビクっ、と怯えるように最上が震えた。
俺はお構いなしに腰をゆすって、絶頂の糸を追いかける。
「あっ♡んっ♡さいこおっ♡♡♡」
「キミは……私を、知っていた、のか？」
あ……っ♡大っきいのキたぁ……っ♡♡♡
「うんッ♡もがみけーじ、だいすきぃっ♡♡♡」
びくびくとうねるアナルに、最上も堪らず吐き出した。
「……そうか」
最上がされるがままなのをいいことに、俺はイイ所を存分に擦って楽しんだ。

※

「……職場にはここから通うといい。こんな時間だからな」
「いいの？さんきゅ〜」

ついつい喫チンにふけってしまった。さっと寝てから、出勤させて貰おう。
「おやすみ」
ぎゅ、と背中を向けた最上に後ろからひっつくと、ビクリと身体が震えた。
「……」
はー、霊体すべすべで気持ちいいわ〜。ねむ……。

※

数日後。
なんかこう、ヤりたくなるタイミングって被るんかね？満月？
ショウくんと島崎から同時にメールが来て、ちょっと悩む。ショウくんは良いチンコしてるんだけど、物足りないんだよな……今日は島崎にしようかな。
と、メールをよく読むと、島崎は仕事上がりの９時、ショウくんはライブ終わりの夜中１時に来れないか、ってお誘いだった。これならハシゴできるな。
俺は２人にＯＫの返事をした。

「……最近はどんな男と付き合ってるんだ？」
メールを返していると、丁度モブも芹沢もトメちゃんもいないから、エクボが雑談代わりに聞いてきた。
「美容師とバンドマンとバーテン」
「……なるほど、チャラ男三強か」
「そ。遊び易くて助かるわ〜」
「上手くやれよ。今度は助けに行ってやらねぇからな」
「上手くやってるよ。……ん、最近、梅林の婆さん顔出してねぇな。電話するか」
お得意さんに電話すると、調子が悪くて、とか弱い声が出た。
「え？ちゃんと病院行ってます？……駄目じゃないですか、しんどい時こそ行かないと……じゃあ俺が付き添いますんで、これから行きましょ。……はい、はい、１時間後」

電話を切る。
「悪いけど店番頼むわ」
「……なあ、霊幻」
「んー？」
吐き戻し用のビニール袋と、スポドリと、膝掛けとか通院用品をトートバッグに詰めてる俺にエクボが話しかけてくる。
「お前さ、俺様に抱かれたいとか思わねえの？」
「思うよ。めっちゃ思う。お前セックス上手そうだもん」
エクボが息を呑んだ。
「だったら……！」
「でも、それより俺はお前と一緒にいたいんだよ。これからもずっと。だからお前を誘うことは無ぇから、安心しろよ」
はぁ、と小さくエクボは息を吐いた。
「……そうかよ」
「ああ。じゃ、行ってくるわ」
俺がドアに向かうのを、エクボはじっと考え込んだ瞳で見つめていた。

※

「観覧車、お好きです？」
「好き」
俺は即答した。島崎は思わず吹き出した。
車で近くのたっかい観覧車に連れていってくれる。奢ってくれるらしい。
「わーっ、すげえ！ほら、島崎の店が見えんぞ！」
それに、モブの家に、芹沢の学校。夜景がめちゃくちゃ綺麗だ。
「喜んでもらえて何よりですよ。ま、私には全く価値の無い乗り物ですがね、観覧車は。ちっとも面白くない。まだ戦闘機の方が楽しめる」
「あっそ」
こいつの皮肉だかブラックジョークだかに付き合ってられない。
俺は存分に景色を楽しんだ。

「……だから、来ようなんて思った事無かったんです。連れて来たのも貴方が初めてだ」
ふーん。エクボが飛んでるのとか見えねえかな。
「……貴方がそんなに喜ぶのなら、何処でも連れて行ってあげますよ。世界中、何処でも」
じゃら、と１０数個の部屋の鍵を島崎は手のひらに乗せて差し出して来た。
「何それ」
「鈍いですねぇ。私の部屋の合鍵ですよ」
「多っ！！」
「女に渡してたのを全部回収したんです。──もう、これを持っているのは、貴方だけだ」
「何で？良くわかんねぇけど、１つでいいよ」
鍵の山から、１つつまみあげる。
「ありがとな」
頬を染めてぎゅっと鍵を握る。これでヤりたい時に部屋に突撃できる……！
「……ッ！」
島崎がぐいと俺の手を引っ張って、抱きしめてきた。お、そろそろ頂上か。頃合いだもんな。
「大事にします……ッ！」
「うん。島崎、愛してる……」
あー、キス、気持ちいいな……♡

※

「あ♡あ♡あ……ッ♡」
くちくちとローションたっぷりの指で手マンされて、俺は軽くイキっぱなしだった。
「気持ちいいですか？まあ、聞くまでも無さそうですが」
「そこぉっ♡イィっ♡♡あ、ンっ、も、挿れてぇ……っ♡」
「……ッ、堪え性の無い……」
そう言いながら、焦ったそうに島崎はゴムをつける。

「ン……ッ♡」
ぐぶ、と待ち望んだ衝撃が挿入ってきて、きゅっと足先が丸まった。
「う、あ、あ……ッ♡」
奥まで満たされて行く感覚に、何かに縋りたくなって、島崎の背中に爪を立てる。
「……ッ！」
激しく口付けられて、喉奥までコンコン舌で叩かれて、キュンキュンめすいきした。
「〜〜〜〜ッ♡♡♡」
キスハメさいこぉっ♡イキまくっちゃうぅっ♡
「ん゛ん゛ん゛ん゛ん゛ッ♡♡♡」
ガスガスと奥まで抉られて、ビクビク震える脚がバラバラに揺れる。
「しゅごい……ッ♡♡♡」
身体ん中全部ザーメンで種付けされるようなセックスに、俺は大満足だった。

※

（今日はもういいかな）
夜１２時。腹の奥がジンジン痺れてる。お腹いっぱい♡って感じだ。
ショウくんにやっぱ今日無しで、ってメールしたら、速攻で電話が掛かってきた。
『ずっとほっといたから怒ってんの？』
いや、精々３日なんだが……。
「そんなことない」
『俺も忙しかったんだよ。メールもしなかったのは悪かったけどさ……』
「いやだから、怒って無いって」
『機嫌直してくれよ。なんか奢るから、なっ？』
……コレ、めちゃくちゃハメたくなってんな……。

「そこまで言うなら、許す」
俺はめんどくさくなって、怒ってたことにした。
『やった！今どこにいんの？』
「××駅だ。どこで待ち合わせる？」
『迎えに行くから、待ってて』
んー、シャワー浴びたけど、ちょっと島崎のライムっぽい香水の匂いすんな……ま、ショウくんなら気にしないか。
しばらくすると、馬鹿でかい排気音を立てて、ホンダのバイク、CBRが止まった。
「わ、かっけぇ！」
「ほら、後ろ乗りなよ」
くぐもった声のショウくんがヘルメットを投げてくるが、俺は首を振る。
「事故ったら死ぬから、乗りたく無い」
「あっそ」
「先導してくれよ、タクシーで着いてくから」
ちょっとムッとしたショウくんは、でも大人しくメットを受け取った。
「オッサン、俺の後ついてきてくれ」
タクシーの運転手に声をかけて、走り出す。
信号待ちで横に並ぶと、コンコン、と窓を叩いてきた。
「何？」
窓を開けると、唇にバイクグローブの指がちゅ、と当てられて、それがメットの口元に当てられる。
（キッッッザ……！）
思わずこっちが恥ずかしくなって、赤くなって俯く。と、ビシリと一瞬ショウくんが固まった。
その後すげえ勢いでかっ飛ばすから、タクシーの運転手が困ってた。

※

「デビューが決まったんだよ」

「ん、アッ♡」
ぱん、と腰を打ち付けられながら誇らしげに言われる。
「すごっ♡い♡じゃんっ♡♡♡」
んぅうっゴリゴリ気持ちいいれすぅっ♡♡♡ヘコヘコ腰が動く……ッ♡
「でもさ……プロでやっていけんのかな、とか思っちゃったりもするんだよね」
「ん゛ッ♡♡♡」
ごっ、と奥を抉られて、びびび、と足先に麻痺感が走る。イったぁ……ッ♡
「ショウくんなら大丈夫だよ」
落ち着いた俺はぎゅっと腰を振り続けるショウくんの頭を抱きしめた。
「俺がついてる」
「それ……は……」
ちょっと黙って、ショウくんはピストンを続けた。
「う、ッ……」
果てて、どさっと俺に倒れ込んできた。
「……俺、年上好きだったのかも」
「ふうん。俺、ねーちゃんがいるから年上はあんまりなんだよなあ」
ショウくんが笑う。なんだか妙に上機嫌で、俺も嬉しくなって笑った。
イチャイチャとベッドの中でおしゃべりをして、キスをして。

すっかり遅くなってしまった。

※

（ね、眠い……）
足がもつれる。ふらふらとアパートに向かう道のりが辛い。
最上のバーが見えて、俺は吸い込まれるように入っていく。
「……ベッド貸して……」

「仕事か？ご苦労なことだ」
最上は部屋の鍵を投げてくれる。俺はふらふらと２階に上がってベッドに倒れ込んだ。

※

ぴちゃ……くちゃ……

水音で目が覚めた。最上が俺のインナーをたくし上げて、胸を舐めてる。乳首かと思ったら、心臓のあたり……？
「ん……何してんの……？」
びく、と最上が跳ねた。はは、何ビビってんの？笑えるだろ。
「……何しているんだと思う？」
「分かんね……きすしよ……」
ぐいっと服の襟首を掴んで引っ張り上げ、口付ける。
驚いたらしい最上は、でも抵抗せずに、そのままくちゃくちゃと舌を俺に喰わせてきた。
「な、挿れていーよ」
パンツを下にずらして、くぱ♡とアナルを指で開いて見せる。
「ゴムある？無かったら俺のジャケットから……」
「必要無い」
ず、と。
「ア゛ア゛ア゛ッ♡♡♡」
腹の中に、チンコが侵入してきた。
な、何っ？♡直接前立腺が叩かれてる……っ♡♡♡
「これは……中々……ふむ、ちょっと霊素をいただくぞ。何、私の霊力で補填しておく」
「ひ、ぃんっ♡♡♡」
ず、ず、ず、と内臓から何からチンポでめちゃくちゃに掻き回される。
「すげ……っ♡ィイ……っ♡♡♡」
俺のチンコが壊れたみたいにぶしゅぶしゅ精液を吐き出してる。オスイキもメスイキもしまくって、はは、わけがわかんねぇ……っ♡

「気に入ったか？」
「うんっ♡もっとやってぇっ♡♡♡」
は、と嘲るように笑う最上の腰を足で抱きしめる。
「だいすきぃ……っ♡♡♡」
何故か、とても苦しそうに──最上は顔を歪めた。

※

はー、なんか久しぶりにアパートに帰る気がすんなぁ……はぁ！？
俺の部屋はドアが吹っ飛んで、真っ黒焦げになっていた。全焼だ。
「どういうことだよ！？」
『あのねえ霊幻さん、連絡つかない番号書くのやめてくれる？……昨日アンタの部屋に火炎瓶が投げ込まれて、あっという間に燃えたんだよ。たまたま居なくて良かったねぇ』
くそっ、まただ……！
俺を逆恨みした昔の男が、たまにこう言うことをしてくるのだ。おかげで、貴重品を部屋に置かなくなった。

相談所にて。
「あ゛ー、部屋が燃えたあ……」
「またかよ」
うんざりした声でエクボが言う。
「大丈夫ですか？しばらく俺の部屋来ますか」
「マジ！？いいの！？」
「やめとけ。男と住んでるなんて分かったら、霊幻のみならず芹沢の身まで危なくなる」
心配して言ってくれた芹沢を、エクボは鼻で笑い飛ばした。
「大丈夫だよ、俺だったら」
「わっかんねーぞ、コイツどんな男引っ掛けてるか分かったもんじゃねーからな。なんかヤバい能力者ひっかけてる可能性もある」
俺の男癖の悪さを知ってる芹沢は、う゛、と口ごもった。
「ま、いい大人なんだから、自分でなんとかするこった」
「分かってる……」

予約表を見ながら唸ってる俺に芹沢が苦笑する。
「いい加減、落ち着いたらどうですか？例えば恋人を作るとか」
「相手がいねぇよ……誰がこんなドクソビッチを恋人にするんだよ」
「案外、居るかもしれませんよ、身近な所とか」
じ、と芹沢が俺を見つめる。
「居たらいいよなぁ……あー、美少女が空から降ってこねえかなー！！」
はあああああ、と芹沢は大きなため息をついた。
「降ってきたところで、霊幻さんのことを好きにはならないと思います」
「なんだと！？わかんねーじゃねえかよ！！」
とまあ、きゃっきゃと楽しい就業時間は過ぎて。

（どーすっかなー……）

俺は呆然とアパートの部屋の焼け跡に立って眺める。
と。

最上んとこ、泊めて貰えないかな？

といい事を思いついた。あいつあんまり女連れ込んでないっぽいし、上手く頼めばいけるのでは？
善は急げだ。俺は最上のバーに向かう。
「最上！もーがーみー！！」
ドンドン、と何度も扉を叩くが、返事が無い。Closedの札を指で弾く。
（開いてる……？）
キィ、とドアを開くと、チリリンとドアベルが鳴った。
「もがみー？」

ヒソ
　　　　ヒソ

ヒソヒソヒソヒソヒソヒソ

真っ暗な中、話し声がする。なんだ、客居るんじゃん。

「オ……イ……デ……」
「最上？」
話しかけてきた方に向いたら、ぐちゃっと何かが潰れた音がした。

「何か用かね」
「うひゃっ！？突然真後ろから話しかけてくんなよ！！びっくりしたあ……」
最上がパチンと指を鳴らすと、バーにいつもの薄暗い灯りがともる。あれ、誰もいないな。
「開店前に入るからだ」
「悪ぃ悪ぃ。……あのさ、俺、最上と一緒に住みたい」
カウンターの中に入って開店準備の続きを始めた最上が、ぴたっと止まった。
「……それは、私と一緒になりたいということか？」
「？うん」
「……………………」
最上はかなり長い間、黙々と料理の仕込みをしていた。
「……キミは、そんなに私のことを……」
じ、と見つめられたので、ニコっと笑っておいた。
「……いいだろう。ほら、合鍵だ。それと、部屋を増やしたから、私物はそこに置くといい」
鍵を受け取って２階に上がると、どういう仕組みか分からないけど一部屋増えてた。倉庫だ。同じ鍵で開くから、荷物を置かせてもらった。
寝室も、一回り大きくなって、ベッドがキングサイズになっていた。ありがたく大の字になって眠る。
「ん……」
ちゅ、と額に口付けられる感覚で意識が浮上する。

ごそごそと最上が隣に潜り込んだので、俺はその背中にまたきゅっと抱きついた。
「すきぃ……」
はー、すべすべで、本当に気持ちいい……。
「……」

次の日の朝、早くから寝たからパカっと目が覚めてしまった。
１階に降りて、唯一ささっとできる味噌汁と米を作る。腹減ったー。
「……何をしている」
「見りゃ分かるだろ、味噌汁作ってんだよ。これから毎朝作ってやるわ」
世話になってる間は、それくらいはしてやろう。
「！！……頼む」
何故かすごーく小さい声で、最上は応えた。

※

髪が伸びてきた。俺が島崎とショウくんと最上との間を反復横跳び始めて、１カ月経ったんだな、としみじみ気が付いた。
……そろそろ飽きてきたなぁ。新しい男探すか……。
いつもの美容院に入ると、馴染みの美容師ではなく、島崎が出てきた。
「今日は島崎がやってくれんの？」
「これからは、ずっと私が担当します」
する、と長い指で髪を漉かれる。
「私以外に髪を触らせてはいけませんよ？」
「りょーかい」
島崎上手いからな、指名料無しでやってくれるなら助かるわ〜。俺は雑誌を読みながら、島崎の話に適当に相槌を打っていた。

※

ショウくんが差し出したヘッドホンで、新曲に聴き入る。
「いい曲だな……！」
「だろ？発表を楽しみにしててくれよな」
ニッと笑うショウくんが、ずっと俺の左手の指を弄っていた。
「アキラさんが『大丈夫』って言ってくれたから、全力が出せた」
「馬鹿言え、ショウくんの努力だ」
ショウくんがはにかむ。
「あのさ……好きだ」
「俺も」
両手を恋人繋ぎして、ちゅっちゅと口付ける。
このキスにも、飽きたなあ。

※

新しい男も捕まえた。アパートの修理も終わった。
俺は
『今までありがとう、楽しかった。さよなら。貴方の幸せを願ってる。愛してる』
と手紙を作って（島崎のは点字を打った）、合鍵と一緒に島崎、ショウくん、最上の部屋にそれぞれ投函した。

楽しかったー！元気でな！

俺は新しい男の手を取って、ホテルにしけこむ。
当然、切りやすそうな男だ。抜かりはない。

※

「お、お前と寝ようとすると知らない男が枕元に立つんだよ！！」
そう言って、男が半裸でホテルから逃げ出した。俺のチンポが！！
首を傾げて靴を履こうとすると、ブツっと靴紐が切れた。まただ。
「最近ツイてねえな」
独りごちてアパートに戻る。
相談所に行くと、久々に顔を出したエクボがすげえ睨みつけてき

た。
「お前、何した？とんでもねえレベルの呪いがびっしり絡みついてんぞ。生きた縄みたいな……」
「心当たりは無えなあ……」
エクボは顎に指を当ててしばし悩む。
「……ちなみに、最近切った男って誰だ？」
「島崎亮とショウくんと最上啓示」
「馬ぁぁぁぁぁあああああ鹿！！！！！！！！」
めちゃくちゃ怒ったエクボに俺は思わず両手を上げた。降参だ。
「や、大丈夫だって！お互い遊びだったし、綺麗に切れたから！！」
「全部お前の！！主観だろうが！！そう言って何回刺されてんだこの馬鹿！！」
「２回」
「回数訊いてんじゃねえよこの馬鹿！！……とりあえずその呪いは十中八九、最上だな。そのレベルのをかけられる奴が他にいねぇし、精神操作系の複雑なヤツだからな。……残りの２人は一般人なんだよな？」
「た、たぶん？」
いや、と考え込んでいた芹沢が否定の声を上げる。
「島崎亮って、あの島崎ですよね？五超の」
「うん」
「……島崎君を敵に回したんだとしたら、相当厄介ですよ……」
「敵に回してねえって」
「どんなヤツなんだ、その島崎ってのは」
抗議する俺を無視してエクボが芹沢に訊く。
「たぶん、持ってる超能力の大きさは俺と同じぐらい。でも俺より頭が良いし、テレポートができる」
「はぁああ！？一級品の超能力者じゃねーか！！」
「それに……ショウくん……もしかして、この子じゃないですよね？」
芹沢が見せてきた画像に、そうそう、この子、と頷いた。
「マジかぁ……」

「そいつは？」
「俺より強い超能力者だよ。この子だけでも大変だけど、ショウくんを怒らせたとなると、社長……同じぐらいかそれ以上強い超能力者のお父さんが出てくるから、めちゃくちゃ厄介かも……」
「こッ……の……馬鹿！！！！」
頬をひくひくさせながらエクボが出て行く。
「あっおい、どこ行くんだよ！」
「うるさい、付き合ってられるか！自分で何とかしろ！！」
「そりゃないぜ〜！」
情け無く叫んでもエクボは帰ってこない。
「呪いか〜」
仕方なく、所長の椅子に座って伸びをする。
「まあ、日常生活に影響無いし、放置してちゃダメかな？」
「それだけ強力な呪い、命に関わると思いますよ……うーん、俺じゃあ分かんないな……誰か呪いに詳しい人いないかな」
「あっ、最上が詳しいぞ！！」
「……いやいやいや火に油を注ぐ気ですか！？！？」

キ、コキ、コプン、と事務所の蛍光灯が点滅する。

「あれ？電球切れたか？」

キ、ココ、ココキ。

ふ、と暗くなって。

ぱ、と明るくなったら、痩せこけた３人の男が、俺を取り囲むように立っていた。
「うわぁああぁっ！？！？」
変わり果てた姿の、島崎、ショウくん、最上だった。
「可哀想に……お前ら死んじまったのか」
「死んでませんが！？！？」
くわ、と島崎が昏い眼窩を怒らせた。

「そもそも私は死人だ！！」
「俺たち、アンタが突然居なくなったから仕事休んで探してたんだよ！！心配かけさせやがって……！！」
「そっか……ありがとな。なんでそんなことを？」
ぽかん、とする３人の後ろで、芹沢がそっと逃げようとしていた。
「あっ！？ドアが開かない！！」
「無駄だ。私が許すまでこの部屋から出られんよ」
くっ、出られない部屋系の新しいやつか……！！
「何かあったのかと心配してたのに……貴方は浮気して遊んでたんですね？」
「見損なったぜ」
「最低だな」
３人の言葉にグゥの音も出ないが、そもそも付き合って無いんだが……。
「……貴方、私を弄んで楽しんでいたんですか？」
ギラリと光る島崎の眼窩に、良くない方向に話が向かおうとしていることをさとる。
「いやっ、違っ！」
「よくもコケにしてくれたな？」
「この代償は高くつくぞ」
ずい、と３人が怖い顔をして迫ってきた時に。
バン、と入り口の扉が開いた。
「お久しぶりです、師匠」
入ってきたモブに、３人の顔が引き攣る。
エクボ〜〜〜♡モブ呼んでくれたのかよ、愛してる〜〜〜！♡♡♡
「エクボに呼ばれて来たんですけど……事情はよく知りませんが、師匠を傷付けるなら、見過ごせないな」
モビかっこい〜〜〜♡♡♡抱いてッ！♡♡♡
「いやっ、そもそもさぁ！」
かくかくしかじか。
焦ったショウくんの説明で、困った顔になったモブは、うーんと腕を組んで唸った。
「いや、コレ師匠が悪くないですか？」

「はぁ！？！？！？！？」
コクコクコク、と湯呑みを手にした３人は頷いている。
「……いやだってさぁ……」
「責任取ってちゃんと結婚したらいいんじゃないですか？」
モブを除いた全員が吹き出した。
「モモモモブくん！？ほら、あのさ、俺みたいなクソビッチ押し付けられる方も困るからさ……！？」
「……そうだな、キミみたいなロクデナシを面倒見てやれるのは私ぐらいだろう。やれやれ、帰るぞ」
ぐい、と最上に手を引かれる。
「いえいえ、私がしっかり見ておくのでご心配無く。新隆さん、今日から私のお家で暮らすんですよ」
ぐい、と反対の手を島崎に引っ張られる。
「ちょっと！霊幻さんの本命は俺なんだからな！！俺の！！」
ぎゅっ、とショウくんに抱き付かれた。
「師匠、誰が本命なんですか？」
いねぇーよ！！！！
じ、と３対の瞳に喰われんばかりに見つめられる。
「は、はは……俺は飛べる！！」
俺はビョインっと真後ろに身体を跳ねさせて、ケツで窓ガラスをブチ破って外に踊り出た。
「危ないなあ」
モブが浮かせてくれたので、そのまま走って逃げる。
「貴方、馬鹿なんですか？」
シュッと目の前に島崎が現れる。
「逃げられるわけねーだろ。あ、親父？うんそう、座敷牢準備できた？」
ショウくんがふわっと飛んでくる。
『呆れた奴だな』
頭の中に最上の声がして。

「鳥になりてぇ～！！！！」

俺の声だけが、空を飛んで行った。

終